

〈西田 勲教授最終講義〉

経 済 学 部 長 挨 拶

望 月 清 司

この3月末日で、わが経済学部は、70歳のご定年で本学を退職される2人の教授とお別れすることになりました。そのおひとり、つい先日の大雪の日に最終講義をなさって下さった大友福夫教授ですが、本日は西田勲教授の本学での最後のご講義をこうして皆さんと拝聴することになった次第です。西田教授は、大友教授とともにのちにお話しするように本学が戦後新制大学として再発足した当初からお勤めになっておられたスタッフであります。その意味では、ことしは専修大学の戦後史にひと区切りがつく年とも言えるわけで、ある種の感慨なきを得ません。

昨年、内田義彦・古島敏雄両教授をお送りした最終講義とちがって、ことしは大友・西田両教授の期せずして一致した御申出を尊重し、文字どおり両教授の年度授業の最後の時間をゼ・ラスト・レクチュアとして拝聴することになりました。長く大学を支えてこられた功績ある教授のご講義を、こうした形でうかがうことは、単に皆さんにとってだけでなく、私ども経済学部の教員一同にとっても、長く忘れられない思い出となるはずです。このような記録を不断につみ重ねてゆくことによって、大学の真に大学らしい歴史が書きつがれてゆくのだと思います。

目 次

経済学部長挨拶	望月 清司(1)
同僚代表謝辞	鈴木 直次(4)
〈最終講義〉	
アメリカと日本の財政	西田 勲(7)
編集後記	(32)

西田勲教授は——、いやこれからは西田先生とだけお呼びすることにいたします。単に堅苦しいからというだけではありません。私は昭和29年に本学を卒業したのですが、その在学中に先生の「貿易論」の講義を生田の旧バラック教室でお聞きしています。古い言葉では「講筵に連なった」と言いますが、要するに答案を読まれて採点された「もと学生」だったわけで、ですから私にとっての「先生」は教員同士で呼びかける敬称である以上に、「もと先生」である西田先生なのです。

さて、西田先生は交友先生と同じ年、昭和24年に本学にご入職になりました。そのとき本学は旧制大学としての約60年の歴史を誇っておりましたが、戦後の新しい基準で新制大学として発足するには、設備の拡大やカリキュラムの充実などいくつもの難関をこえねばなりません。西田先生は、そうした時期に全国から招かれて専修に集められた気鋭の助教授陣のお一人だったのです。昭和24年といえば、東京のあちこちにまだ焼跡が姿をさらしていました。軍隊からもどった学生が、軍服のまま大学の角帽をかぶり、すき腹を抱えて神田の古本屋街をめぐっていた、そんな時代です。教材も研究図書も不自由きわまる状況のなかで、先生たちは専修大学商経学部の創造的な発展のために心を砕かれたのでした。

お配りした「西田 勲教授最終講義資料」でござんのように、先生は昭和13年に京都大学経済学部を出られて、現在の毎日新聞の前身である東京日日新聞に経済記者としてお勤めになっておられます。大学3年の時に、中国に対する全面的侵略が開始され、大学卒業の翌年に第2次世界大戦が勃発した、そういう激動の時代。心ある者なら世界の政治と経済のどんな動きからも目を離せない、そういう時期に先生は、大学生、新聞記者、貿易研究所員として国際経済の研究と分析にはげまれたわけです。まるで温厚という文字がそのまま洋服を着ているような「仙人」先生のご風貌からは、そのご研究のゆえに治安維持法という悪法に問われて一年近く獄舎の生活をされたなどとは想像もつかないことでしょう。

戦後の西田先生は、「主要業績」でもおわかりのようにアメリカ経済の独占的な構造を、とくに貿易と労働問題に焦点をあててご研究になりました。レイバー・リサーチ・アソシエーションから出た『現代の独占資本』、アンナ・ロチェスター著『アメリカの支配者』という二つのご翻訳は、当時の先生のご関心をもっとも的確に示すお仕事です。

ここで、こうした資料を読んで上の2冊を図書館や古本屋で探して見ようと思った学生諸君にひとことお話ししておきたい。上の2訳書とも訳者は西田勲ではなく「立井海洋」となっています。これは当時の先生のペンネームです。

学生時代、私は中央線の荻窪駅近くに住んでおりました。西田先生は一駅隣の阿佐ヶ谷にお住まいで、私は先生のお宅に、二、三度お邪魔したことがあります。『現代の独占資本』が

出版された頃、先生は胃を悪くされ手術を受けてお休みになっておられました。ある住宅の間を若い奥様と間借りされていた先生は、お見舞にあがった学生を、今日ここに拝見できるとまったく同じご温顔で迎えて下さり、翻訳の苦労話などして下さいました。その折、ペンネームのいわれを伺ったところ、あのシャイなご表情で「いやなに、＜立て、胃潰瘍！＞というだけのことです」とおっしゃったのです。漱石とか鷗外とは言わぬまでも、ペンネームとはもう少し真面目に苦心して考えるものだと思っていた私は、一瞬肩をすかさされたような気持を覚えた一方、やはりこれはいかにも西田先生らしいな、と納得したことであります。

アメリカ経済論を中心とする先生のお仕事については、専門の立場からあとで鈴木直次助教授がお話し下さるはずです。私はここで、先生がそのご研究の幅を次第にアメリカひいては世界の労働者運動史のほうへ広げてゆかれたこと、そして従来とかく異端として冷たく処遇されてきた思想や運動にむしろ熱い注目をはらってこられたこと、これを特筆しておきたいと思えます。それからは、人類史の革新に向けての、静かなしかし尋常でない先生のパトスをおのずからに物語っているように思われるからです。

これから私も30年前の一学生にもどって、先生の最終講義に耳を傾けようと思えます。諸君も、専修大学経済学部で先生の教えに接した思い出をいつまでも大切にしてほしい。一言感懐をのべて学部長あいさつといたします。